

# 古文「き」と「けり」の違い 100題ドリル

対象：高校生・大学受験生 | 著作権：誰でも古典塾 (kotennosensei.com) 無断転載禁止

## はじめに

過去の助動詞「き」「けり」は、どちらも「～た」と訳せますが、**意味（ニュアンス）の使い分け**が入試で問われます。傍線部を次の**3タイプ（ア・イ・ウ）**に分類しましょう。

記号	語	意味	出やすい場所・目印
ア	き	直接過去（自分が体験した「た」）	体験談・日記。「～し時」「見しかば」など自分の見聞
イ	けり	伝聞・過去（人づて／物語の語り「～た」）	地の文・物語の語り出し「昔、～ありけり」
ウ	けり	詠嘆（～だなあ、という気づき・感動）	和歌の中／会話文の「今気づいた」けり

鉄則 - 「き」（し・しかを含む）を見たら → 直接過去（ア）。話し手が自分で体験したこと。 - 「けり」（ける・けれを含む）を見たら → まず〈和歌・会話か／地の文か〉を見る。 - 和歌の中・会話文の気づき → 詠嘆（ウ）。 - 地の文の語り → 伝聞・過去（イ）。

## 🎯 解き方のコツ

- 語の形で「き」か「けり」かを確定。き系＝き・し（連体）・しか（已然）／けり系＝けり・ける（連体）・けれ（已然）。
- き系なら即「ア（直接過去）」。「（私が）～し」と自分の体験。
- けり系は場所で判断。和歌の中や会話の感動なら「ウ（詠嘆）」＝「～だなあ」。物語の地の文なら「イ（伝聞・過去）」＝「～た（そうだ）」。
- 和歌の「けり」を機械的に「～た」と訳さない。詠嘆「～だなあ」を疑う。

## 採点表

部	問題	目標
第1部 基礎	Q1～Q20	18／20
第2部 標準	Q21～Q50	24／30
第3部 応用	Q51～Q80	22／30
第4部 入試	Q81～Q100	14／20

### 【第1部】基礎 (Q1～Q20)

Q1. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

昔、男ありけり。 **答え：イ** **解説：**物語の語り出しの「ありけり」。地の文の伝聞・過去で「(男が) いた (そうだ)」。

Q2. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

京より下りし時に、思ふこと多かり。 **答え：ア** **解説：**「し」は「き」の連体形。話し手が自分で京から下った直接過去。

Q3. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

(歌) 年の内に春は来にけり。 **答え：ウ** **解説：**和歌の中の「けり」。「春が来てしまったのだなあ」という詠嘆。

Q4. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

今は昔、竹取の翁といふものありけり。 **答え：イ** **解説：**物語の語り出し。地の文の伝聞・過去で「いた (そうだ)」。

Q5. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

昨日、池の月をなむ見し。 **答え：ア** **解説：**「し」は「き」の連体形 (係助詞「なむ」の結

び)。話し手が自分で見た直接過去。

Q6. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「あはれ、かかる事も**ありけり**」と独りごつ。 **答え：ウ** **解説**：会話（独り言）の中の気づき。「こんな事もあったのだなあ」という詠嘆。

Q7. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

我、幼くてこの寺に**詣**でき。 **答え：ア** **解説**：「き」の終止形。話し手が自分で参詣した直接過去。

Q8. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

ある所に、年老いたる女**住みけり**。 **答え：イ** **解説**：地の文の語り。伝聞・過去で「住んでいた（そうだ）」。

Q9. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

(歌) 人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほ**ひける**。 **答え：ウ** **解説**：和歌の結び（係助詞「ぞ」の結び）。「昔のままに匂っているのだなあ」という詠嘆。

Q10. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

我、昔この道をしばしば**通り**き。 **答え：ア** **解説**：「き」の終止形。自分で通った直接過去。

Q11. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

帝、長く世を治め**たまひけり**。 **答え：イ** **解説**：地の文の歴史的叙述。伝聞・過去で「お治めになった」。

Q12. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

なほたづねて見れば、はやなかりけり。 答え：ウ 解説：見て今気づいた感動。「もう無いのだなあ」という詠嘆。

Q13. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

父に従ひて、幼くて筑紫に下りき。 答え：ア 解説：「き」の終止形。話し手が自分で下った直接過去。

Q14. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

この事、世に長く語り伝へける。 答え：イ 解説：地の文の語り。伝聞・過去で「語り伝えた(そうだ)」。

Q15. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「はや、年も暮れにけり」と、人々言ふ。 答え：ウ 解説：会話文で今気づいた感動。「もう年も暮れてしまったのだなあ」という詠嘆。

Q16. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

もとより友とする人、一人二人して行きけり。 答え：イ 解説：地の文の語り。伝聞・過去で「行った」。

Q17. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

いとうれしと、その折思ひき。 答え：ア 解説：「き」の終止形。話し手が自分でそう思った直接過去。

Q18. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

家に帰りて見しかば、文ありき。 答え：ア 解説：「しか」は「き」の已然形。話し手が自分で見た直接過去。

Q19. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「さは、汝なりけり」と、驚きと言ふ。 **答え：ウ** **解説**：会話の中で今気づいた感動。「では、お前だったのか」という詠嘆。

Q20. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

いとあやしき翁、竹の中にありける。 **答え：イ** **解説**：地の文の語り（連体形止め）。伝聞・過去で「いた（そうだ）」。

## 【第2部】標準（Q21～Q50）

Q21. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

われ、その夜のことをよくおぼえき。 **答え：ア** **解説**：「き」の終止形。自分が体験して覚えている直接過去。

Q22. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

昔、惟喬の親王と申す親王おはしましけり。 **答え：イ** **解説**：物語の語り出し。地の文の伝聞・過去で「いらっしゃった」。

Q23. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

（歌）見わたせば花も紅葉もなかりけり 浦の苫屋の秋の夕暮れ **答え：ウ** **解説**：和歌の中の「けり」。「何も無かったのだなあ」という詠嘆。

Q24. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

ありし日の御面影、今も忘れず。 **答え：ア** **解説**：「し」は「き」の連体形。自分が見た「以前の」の意。直接過去（回想）。

Q25. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

その国に、いやしき男なむ**住みける**。 **答え：イ** **解説**：地の文の語り（係助詞「なむ」の結び）。伝聞・過去で「住んでいた」。

Q26. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「年へにける**かな**」と、しみじみ言ふ。 **答え：ウ** **解説**：会話文の感動。「年が経ってしまったのだなあ」という詠嘆。

Q27. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

旅の空にて、月をぞ**眺めし**。 **答え：ア** **解説**：「し」は「き」の連体形（係助詞「ぞ」の結び）。自分が眺めた直接過去。

Q28. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

昔、ある聖、深き山に**籠りけり**。 **答え：イ** **解説**：地の文の語り出し。伝聞・過去で「籠もっていた」。

Q29. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

（歌）忍ぶれど色に出でに**けり**わが恋は物や思ふと人の問ふまで **答え：ウ** **解説**：和歌の中の「けり」。「恋が顔に出してしまったのだなあ」という詠嘆。

Q30. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

都にて聞き**しか**ど、げにと思はざりき。 **答え：ア** **解説**：「しか」は「き」の已然形。自分が都で聞いた直接過去。

Q31. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

大納言、おほきにかしこまり**けり**。（物語の地の文） **答え：イ** **解説**：地の文の叙述。伝聞・過去で「かしこまった」。

Q32. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

(歌) 山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと思へば **答え：ウ** **解説**：和歌の結び(係助詞「ぞ」の結び)。「さびしさがまさるのだなあ」という詠嘆。

Q33. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

われ、若かりし時、武芸を好みき。 **答え：ア** **解説**：「き」の終止形。自分の若い頃の体験。直接過去。

Q34. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

今は昔、丹波に出雲といふ所ありけり。 **答え：イ** **解説**：説話の語り出し。地の文の伝聞・過去で「あった」。

Q35. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「あはれ、いと寒くなりけり」と、つぶやく。 **答え：ウ** **解説**：会話文で今気づいた感動。「すっかり寒くなったなあ」という詠嘆。

Q36. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

去年見し人に、今年もまた逢ふ。 **答え：ア** **解説**：「し」は「き」の連体形。自分が去年見た直接過去。

Q37. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

この男、京にのぼりける。(物語の地の文) **答え：イ** **解説**：地の文の語り(連体形止め)。伝聞・過去で「上った」。

Q38. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「あはれ、夜も明けにけり」とて、急ぎ立つ。 **答え：ウ** **解説**：会話文で今気づいた感動。「もう夜が明けてしまったのだなあ」という詠嘆。

Q39. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

その音を、たしかにこの耳に聞きき。 答え：ア 解説：「き」の終止形。自分が確かに聞いた直接過去。

Q40. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

男、女を盗みて、芥川といふ川を率ていきけり。 答え：イ 解説：物語の地の文の叙述。伝聞・過去で「連れて行った」。

Q41. 次の傍線部「けれ」は、ア～ウのどれか。

「げに、世こそ変はりにけれ」と、つぶやく。 答え：ウ 解説：会話文の感慨（係助詞「こそ」の結び「けれ」。「世は変わってしまったのだなあ」という詠嘆。

Q42. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

われ、いにしへ宮仕への身にありしかば、内裏の様もよく知る。 答え：ア 解説：「し」は「き」の連体形。自分が宮仕えしていた直接過去（体験）。

Q43. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

帝、その者を召して、官（つかさ）を賜びけり。（地の文） 答え：イ 解説：地の文の歴史叙述。伝聞・過去で「お与えになった」。

Q44. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「げに、世は夢のごとくありけり」と嘆く。 答え：ウ 解説：会話文の感慨。「世は夢のようであったのだなあ」という詠嘆。

Q45. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

その夜、われは一睡もせざりき。 答え：ア 解説：「き」の終止形（打消「ず」+き）。自分が眠らなかった直接過去。

Q46. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

昔、世になく心高き女ありける。 答え：イ 解説：物語の語り出し（連体形止め）。伝聞・過去で「いた」。

Q47. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「人の情けの、げにありがたかりけり」と、涙ぐむ。 答え：ウ 解説：会話文の感慨。「人の情けはありがたいものだなあ」という詠嘆。

Q48. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

かの人に逢ひしかど、もの言はで別れにき。 答え：ア 解説：「しか」は「き」の已然形。自分が逢った直接過去。

Q49. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

その後、男は都へも帰らで、その国にとどまりけり。（地の文） 答え：イ 解説：物語の地の文。伝聞・過去で「とどまった」。

Q50. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「あな、めでた。かかる人も世にありけり」と、めで惑ふ。 答え：ウ 解説：会話文で今気づいた感動。「こんな立派な人もいたのだなあ」という詠嘆。

## 【第3部】応用（Q51～Q80）

Q51. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

我、その合戦の場にありき。げにおそろし。 答え：ア 解説：「き」の終止形。自分がその場にいた直接過去（体験）。

**Q52. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。**

昔、東の方に住む人、武蔵野に分け入りけり。 **答え：イ** **解説：**物語の地の文の語り。伝聞・過去で「分け入った」。

**Q53. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。**

(歌) あひ見ての後の心にくらぶれば昔はものを思はざりける。 **答え：ウ** **解説：**和歌の結び。「昔は何も思っていなかったのだなあ」という詠嘆。

**Q54. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。**

老いては、若くありし昔のみ恋しく覚ゆ。 **答え：ア** **解説：**「し」は「き」の連体形。自分が若かった直接過去（回想）。

**Q55. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。**

この僧、夜ごとに堂にこもりて、ひとり経をぞ読みける。(地の文) **答え：イ** **解説：**地の文の叙述（係助詞「ぞ」の結び）。伝聞・過去で「読んでいた」。

**Q56. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。**

「今ぞ知る、苦しきものは人の世なりけり」とぞ歌ひける。 **答え：ウ** **解説：**「今ぞ知る」とあるように、今気づいた感動。「人の世であったのだなあ」という詠嘆。

**Q57. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。**

幼かりし折、祖母にこの物語を語られき。 **答え：ア** **解説：**「き」の終止形。自分が語ってもらった直接過去（体験）。

**Q58. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。**

昔、ある男、わづらひて、心地死ぬべくおぼえけり。 **答え：イ** **解説：**物語の地の文。伝聞・過去で「思われた」。

Q59. 次の傍線部「けれ」は、ア～ウのどれか。

「眺むれば、花こそ散りに**けれ**」と、をしむ。 **答え：ウ** **解説：**会話文の感慨（係助詞「こそ」の結び「けれ」。「花が散ってしまったのだなあ」という詠嘆。

Q60. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

われ、いと幼くして、母に**おくれしか**ば、顔をだに知らず。 **答え：ア** **解説：**「しか」は「き」の已然形。自分が母に先立たれた直接過去（体験）。「おくる」＝先立たれる。

Q61. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

その所に、いと大きな川の**ありける**を、人々渡りわづらふ。 **答え：イ** **解説：**地の文の叙述（連体形）。伝聞・過去で「あった」。

Q62. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「あはれ、はかなき世にも**経にけり**」と涙ぐむ。 **答え：ウ** **解説：**会話文の感慨。「はかない世を過ごしてきたのだなあ」という詠嘆。

Q63. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

その絵を、われ確かに昔**見き**。違ふべくもなし。 **答え：ア** **解説：**「き」の終止形。自分が確かに見た直接過去。

Q64. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

いと久しく時経て後、この事あらは**れけり**。（地の文） **答え：イ** **解説：**地の文の叙述。伝聞・過去で「あらわれた」。

Q65. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

「さても、都は恋しきものなり**けり**」と、旅人嘆く。 **答え：ウ** **解説：**会話文で今しみじみ気づいた感動。「都は恋しいものだなあ」という詠嘆。

Q66. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

われ、その人と契りしことを、今も忘れず。 **答え：ア** **解説：**「し」は「き」の連体形。自分が約束した直接過去。

Q67. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

その国の守、おほやけの物を盗みて、ひそかにたくはへけり。(地の文) **答え：イ** **解説：**物語の地の文。伝聞・過去で「蓄えた」。

Q68. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「げに、命あるものは皆ほろぶるものなりけり」と悟る。 **答え：ウ** **解説：**会話・心内の気づき。「滅びるものであったのだなあ」という詠嘆。

Q69. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

我ら二人して、その山を越えき。いと苦しかりき。 **答え：ア** **解説：**「き」の終止形。自分が越えた直接過去（体験）。

Q70. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

昔、をのこども集ひて、花見にとて出で立ちける。(地の文) **答え：イ** **解説：**物語の地の文の語り（連体形止め）。伝聞・過去で「出かけた」。

Q71. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「おのが心さへ、いつしか変はりにけり」と、思ひ知る。 **答え：ウ** **解説：**心の中で今気づいた感動。「自分の心まで変わってしまったのだなあ」という詠嘆。

Q72. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

その夜、雨いたう降りしかば、え出でずなりにき。 **答え：ア** **解説：**「しか」は「き」の已然形。自分が体験した（雨が降った）直接過去。

Q73. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

昔、男、初冠して、奈良の京、春日の里に狩りに往にけり。 答え：イ 解説：『伊勢物語』風の語り出し。地の文の伝聞・過去で「行った」。

Q74. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「あな悲し。たのみし人もかかる心ありけり」と泣く。 答え：ウ 解説：会話文で今気づいた感動。「こんな心があったのだなあ」という詠嘆。

Q75. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

われ、その使ひに立ちて、みづから文を奉りき。 答え：ア 解説：「き」の終止形。自分が差し上げた直接過去（体験）。

Q76. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

この女、容貌よくて、心ばへもめでたかりける。(地の文) 答え：イ 解説：地の文の人物紹介（連体形止め）。伝聞・過去で「(よく) あった」。

Q77. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「今年の紅葉は、ことに深かりけり」と、めづ。 答え：ウ 解説：会話文の感動。「今年の紅葉は格別に色が深いなあ」という詠嘆。

Q78. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

我が植ゑし松も、いつしか大きになりけり。 答え：ア 解説：「し」は「き」の連体形。自分が植えた直接過去（体験）。

Q79. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

その後、この寺は次第に荒れて、人も住まざなりけり。(地の文) 答え：イ 解説：物語の地の文の叙述。伝聞・過去で「(住まなく) なった」。

Q80. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「年ごろ思ひつること、今日こそかなひけれ」と、よろこぶ。 **答え：ウ** **解説：**会話文で今か  
なった感動（係助詞「こそ」の結び「けれ」）。「ついになつたのだなあ」という詠嘆。

## 【第4部】入試 (Q81～Q100)

Q81. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

昔、田舎わたらひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけり。 **答え：イ** **解説：**『伊勢物  
語』筒井筒の語り出し。地の文の伝聞・過去で「遊んでいた」。

Q82. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

「これは、われ昔の都にて見し人なり」と、男言ふ。 **答え：ア** **解説：**会話文だが「し」は  
「き」の連体形で、話し手が自分で見た直接過去。

Q83. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

「はるばる来つる旅も、思へば遠く来にけり」と、涙ぐむ。 **答え：ウ** **解説：**会話文の感慨。  
「遠くまで来てしまったのだなあ」という詠嘆。

Q84. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

「われ、その夜、確かにその声を聞きき」と、おのれの体験を語る。 **答え：ア** **解説：**会話文  
だが「き」は話し手自身の直接体験を表す直接過去。

Q85. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

その男、京にものへ行きけるに、道にて見知らぬ僧に逢ひにけり。 **答え：イ** **解説：**物語の地  
の文の叙述。伝聞・過去で「出会った」。

Q86. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

文を開いて見れば、「我はすでに尼になり<sup>に</sup>けり」とぞ書きたる。 **答え：ウ** **解説：**手紙（会話に準じる）の中で、自分の身の変化に対する感慨。「尼になってしまったのだなあ」という詠嘆。

Q87. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

われ、若くて宮仕へに出で<sup>し</sup>かば、世の有様をもおのづから見及びき。 **答え：ア** **解説：**「しか」は「き」の已然形。自分が宮仕えに出た直接過去（体験）。

Q88. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

男、女のもとに通ひけるを、親聞きつけて、いみじう制<sup>し</sup>ける。 **答え：イ** **解説：**物語の地の文の叙述。伝聞・過去で「(厳しく)止めた」。

Q89. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「逢ふも別るるも、皆この関にてあり<sup>けり</sup>」と、感ず。 **答え：ウ** **解説：**会話文でしみじみ気づいた感動。「皆この関で別れてきたのだなあ」という詠嘆。

Q90. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

われ、かの人と同じ船にて、はるかかの島まで渡<sup>り</sup>き。 **答え：ア** **解説：**「き」の終止形。自分が渡った直接過去（体験）。

Q91. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

今は昔、ある下衆の家に、年経たる猫住み<sup>けり</sup>。 **答え：イ** **解説：**説話の語り出し。地の文の伝聞・過去で「住んでいた」。

Q92. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

鏡を見て、「あな、われも老いに<sup>けり</sup>」と、おどろく。 **答え：ウ** **解説：**会話・心内で今気づいた感動。「自分も老いてしまったのだなあ」という詠嘆。

Q93. 次の傍線部「し」は、ア～ウのどれか。

「あはれ、いとほしと思ひし人は、はや亡せにけり」と語る。 **答え：ア** **解説：**「し」は「き」の連体形。話し手が自分でそう思った直接過去。

Q94. 次の傍線部「ける」は、ア～ウのどれか。

その聖、年ごろ山にこもりて、世に出づることもなく**ありける**。 **答え：イ** **解説：**地の文の叙述（連体形止め）。伝聞・過去で「いた」。

Q95. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

「人の命の惜しさも、げにあるものなり**けり**」と、あはれむ。 **答え：ウ** **解説：**会話文の感慨。「命は惜しいものだなあ」という詠嘆。

Q96. 次の傍線部「き」は、ア～ウのどれか。

「この歌は、われ十のとし、はじめて**詠みき**」と、誇らかに言ふ。 **答え：ア** **解説：**会話文だが「き」は話し手自身の直接体験。直接過去。

Q97. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

かくて、年月を経て、男はつひにその国の守になり**にけり**。(地の文) **答え：イ** **解説：**物語の地の文の結び。伝聞・過去で「(国守に) なった」。

Q98. 次の傍線部「けれ」は、ア～ウのどれか。

「思ひきや、かかる山里に住まむとは。世は定めなき**ものこそありけれ**」と嘆く。 **答え：ウ** **解説：**会話文の感慨（係助詞「こそ」の結び「けれ」。「無常のものであったのだなあ」という詠嘆。

### Q99. 次の傍線部「しか」は、ア～ウのどれか。

われ、その軍（いくさ）に加はりて、矢の下をくぐり**しか**ど、かすり傷だに負はざりき。 **答え：ア 解説：**「しか」は「き」の已然形。自分が戦に加わった直接過去（体験）。

### Q100. 次の傍線部「けり」は、ア～ウのどれか。

昔、男ありけり。その男、身をえうなきものに思ひなして、京にはあらじ、東の方に住むべき国求めにとて**行きけり**。 **答え：イ 解説：**『伊勢物語』東下りの地の文。伝聞・過去で「行った」（文頭の「ありけり」も同じ伝聞・過去）。

## 採点・振り返り

部	点数
第1部 基礎 (Q1～Q20)	/20
第2部 標準 (Q21～Q50)	/30
第3部 応用 (Q51～Q80)	/30
第4部 入試 (Q81～Q100)	/20
合計	<b>/100</b>

復習のポイント - 「き（し・しか）」は直接過去（ア）。「（私が）～した」という自分の体験。連体形「し」、已然形「しか」の形に注意。 - 「けり（ける・けれ）」は2つの顔。地の文の語りなら伝聞・過去（イ）、和歌の中・会話の気づきなら詠嘆（ウ）。 - いちばんの分かれ目は「どこにある『けり』か」。和歌や「あはれ」「今ぞ知る」などの感動の文脈は詠嘆を強く疑う。 - 過去の助動詞は「けれ」「し」「しか」の識別とあわせて整理すると、得点が安定する。